〔書　評〕

# ミサオ・レッドウルフ
# 『直接行動の力「首相官邸前抗議」』

（クレヨンハウス2013年）

池　野　重　男

『生活と自治』（2013年12月号）の投稿欄「私の意見／私の異見」に次のような声が紹介されていた――，

大学の近くで，原発をゼロにと仲間たちとアピールを続けています。ところが最近は，なぜか目も合わせず通りすぎる人が増えています。

やっと目が合ったと思うと「原発をなくすのは賛成だが，今ある原発を早く安全に稼働させるほうが経済を安定させ，将来の子どもたちのためになる。だから再稼働反対には反対だ」と得々と述べる物理学部のある学生。

事故を忘れたわけでも無関心なわけでもなく，新たな“原発神話”が作られているのでしょうか。私は，自分のできることをやっていこうと思います。（京都市・奥村陽子）

たしかに，私が接する学生たちのなかにもこのような「新たな“原発神話”」を見る。たとえば，次のようなレポートである――，

……原発ゼロと言っているが，今は節電をして原子力発電の穴を埋められているが，このまま原子力発電なしで生活していけるかといえば，私はできないと思う。東日本大震災の教訓を得て，次は絶対起こらないよう補強したら何の問題もなく電力を受給することができるのではないか。

原発について。日本という国は人口密度が高いため自国で生み出す産物が限られており，依存しなければいけない。その中で原子力は莫大なエネルギーを小規模で生み出せるまさに魔法のようなものである。個々人では生きていけない，何かに依存する日本人が多いのに，どうして脱原発依存ができようか。原発は豊かすぎる日本で生きる代償と思う。当たり前と思っている日常に危険がたくさん潜んでいることを知り，危機管理をすべきだ。

……福島第一原発事故以降，脱原発，原発ゼロの推進運動がなされてきましたが，今の

日本から原発をなくしたら電力供給の不安定化，雇用の縮小，税収の減少，企業の業績悪化と負の連鎖が続き，日本の経済はますます不況に陥ることになりそうです。……原発停止を求める人々は火力発電や再生可能エネルギー活用を求めていますが，質・量・コストいずれの点から見ても期待できないと思います。でも，実際に被災された方々の気持を思うと心が痛いですが，原発が日本の生活基準となっている限りどうしょうもないと思います。

そして原発ゼロを唱えてる人々は産業界の人たちではなく，私たちみたいな一般市民の人たちだし，目先のことばかり考えるのではなく，もっと先のことを考えていかないといけないと思います。

私は原子力エネルギーを使用することには賛成です。なぜなら，原子力エネルギーは日本の産業を守ることや生活水準を維持するための必須エネルギーだからです。

なぜ原子力エネルギーでなければいけないかというと，まず化石燃料ではほとんどが中東からの輸入になるため供給量も価格も不安定であるからである。

次に考えられるのが再生可能エネルギーであるが，調達の効率が悪く，価格の面から考えてみても原子力エネルギーの代替にはならない。

こう見ると，良質の電力を安価で安定して供給するには，やはり原子力エネルギーしかないことが分かる。

……安価な電力の安定供給なしには日本の強みである製造業は世界の市場で競争力を維持することは困難である。事故の影響もあり，「原発を廃止し，再生可能エネルギーで代替せよ」という声が広がっているが，今こそ専門家たちは事故の教訓を生かし原子力発電において安全の確保が十分可能であることを証明しなければいけないと思う。アメリカの米海軍がいい例のようにしっかりとした対策をとれば安全性を可能確保することは十分可能である。そのため今の日本に必要なのは，コストや安全策をしっかり示すことと，リスクを制御・克服し，覚悟を決めて原子力エネルギーを活用するということである。

冒頭に紹介した声が京都からのものでもあるし，私が勤務する大学の所在地が大阪でありレポートを書いた学生たちが近畿圏に住んでいるだろうから，つまり，福島から距離を置く関西だからこその「新たな“原発神話”」現象なのかなとも思うのだが，その実はいったいどうなのだろうか？　そんな心配というか不安の中だからこそ原点に立ち返ることが必要なのかもしれない。そこで，以下に，本書――というか，そのスタイルからして「書」というよりも「小冊子」とでも読んだほうが似つかわしいかもしれないが――を取り上げてみたのだが，本書は，「『知らなかった，知らされなかった，知ろうとしなかった』とは言えない。」と訴える「わが子からはじまる　クレヨンハウス・ブックレット」シリーズの一冊である。

ところで，このシリーズ[1] を創刊するにあたって，クレヨンハウス主宰の落合恵子氏は次のように書いている（表紙の裏側の「『クレヨンハウス・ブックレット』創刊にあたって」より）――，

「知らなかった，知らされなかった，知ろうとしなかったわたしたちが，ここにいる。それらすべてを丸ごと背負って，わたしたちは，いま，ここから，再びのはじめの一歩を踏みださなくてはならない」

これは，チェルノブイリ原発事故の直後，わたしが書いた脱原発のメッセージの一部だと，25年たったいま，ひとから教えられた。

あの時も「そう」考えていたのだ。それにもかかわらず，「ここまで」きてしまった。

わたしたちはすでに知っている。決して事故を起こさない機械はなく，老朽化も含めて，原子力発電所がひとたび事故を起こしたら「どう」なるのかも。

自然への畏敬を忘れ，この地震大国に54基もの原子力発電をつくってしまった責任は，ほかでもないわたしたち大人にある。わたしたち大人の愚かな選択のために，子どもたちは，原子力発電の被害者として生まれて，生きていく社会になってしまった。

かつてクレヨンハウスは，チェルノブイリ原発事故のあと勉強会をし，ささやかながら反対運動もした。しかし，それを持続してこなかった。ほかにやることがいっぱいあって，という言いわけが子どもたちに通るわけがない。責任はきわめて大きい。その反省から，このブックレットを創刊する。

この小さなメディアをつくりつづけながら，「あなた」と柔らかくつながり，共に勉強していこうと思う。もう，知らないとは，知らされなかったとは，知ろうとしなかったとは決して言えない。

サブタイトルの「わが子からはじまる」は，そこから出発し，けれど血縁を越えて，という意味である。

ここで書評しようとしている冊子の著者は，イラストレータであり，二〇〇七年に「すべての『核』に対して『NO』と言うために」活動する非営利団体『NO NUKES MORE HEARTS」を立ち上げて主宰者となり，二〇一一年三月十一日後にはほかの反原発グループと「首都圏反原発連合」を結成。毎週金曜の首相官邸前抗議をはじめ，さまざまなデモ・抗議活動を行なっている。この「首都圏反原発連合」は反原発の「ネットワーク」であり，

1）シリーズとして出版されているものを以下に示しておく――上田昌文『わが子からはじまる原子力と原発　きほんのき』，安田節子『食べものと放射能のはなし』，後藤政志『「原発をつくった」から言えること』，山田真『小児科医が診た放射能と子どもたち』，うえのさえこ／著　いせひでこ／画『目を凝らしましょう。見えない放射能に』，高橋哲哉／著　落合恵子／聞き手『原発の「犠牲」を誰が決めるのか』，田原牧『新聞記者が本音で答える「原発事故とメディアへの疑問」』，肥田舜太郎『ヒロシマから「内部被ばく」と歩んで』，樋口健二『被ばく労働を知っていますか？』，吉原毅『城南信用金庫の「脱原発」宣言』，堀潤『原発の是非を問うことと，わたしたちがやるべきこと』。

団体ではない――「デモ（デモンストレーション／特定の意思表示のため，行進もしくは集会をすること）や抗議（相手の発言や行為を不当とし，ここではとくに直接的に反対意見を主張すること）を直接行動と定義し，それらを主な活動としている団体が集まっています。……やることはデモか抗議だけ。……『いかに効果的な行動をしていくか』『いかに実務を速くスムーズに進めていくか』，この2点を焦点として，会議のうえ活動をすすめています。」（p. 6　引用文中の太字は本書のまま。なお，以下においては煩雑なので引用にあたって太字体の形式は省略する。）

さて，現代若者たちの元気をそのまま展開しているその詳しい活動については，本書に示されている参加人数や記録など（たとえば，資料2『『首都圏反原発連合』活動の軌跡』pp. 10～11，資料4「首相官邸前抗議の参加人数の推移」p. 19）に譲るとして，この書評では，高齢者となったばかりの私が唸らされたいくつかの点を述べることにする。

まずは，抗議やデモ活動などの現場に出ている著者だからこそ見えている現実の深さである。たとえば，この社会のトップはまことに弾圧を効果的に行なっている。そのことを著者は次のように実感させられている――，

> 2011年9月に「9・11新宿・原発やめろ‼‼‼デモ」という大きなデモがあったのですが，そこで何人もの逮捕者が出ました。それ以降……市民ベースで無党派の大きなデモが止まってしまったのです。デモの参加人数がぐんぐん伸びていたところが，一転，頭打ちになってしまったんですね。　p. 7

それでも，著者（たち）は主体的に効果的な戦略を楽しく練る。たとえば，首相官邸前抗議を最初に始めた経緯は，著者によれば次の通りである――，

> 意見聴取会のときのように，会議に参加しているひとたちに聞こえるように，わたしたちの声を届けること，これは言い方を変えれば，「いやがらせ」です（笑）。会議室で＜悪巧(わるだく)み＞しているところに，「お前らの言っているようにはさせないぞ」と言う声が聞こえてくるなんて，相手もやっぱりいやだと思うんですよね。「反対する声を聞かせてやろう」，言ってしまえば「いやがらせをしてやろう」という単純なことから，わたしたちの抗議ははじまっています。　p. 12

著者は，「よく『官邸前抗議は，ツイッターやネットの告知で広がった』と報じられている」けれど，「テレビや新聞といった，メジャーな媒体が報道しはじめた」ら，「いままで官邸前抗議を全く知らなかったひとたち，とくにネットをやらないひとたちの参加がどんと増えました。」という現実を前に，冷静に次のように認識する――，

> 悔しいですが，やはりメジャーなメディアの力，とくにテレビの効果というものを思い知らされ……テレビの影響力というのは強いということを，わたしたちは本当に実感

しました。そして……テレビで報道されなくなったら，やはり人数は増えにくいようです。 p. 21

だからこそ，著者は「メディアとの関わり方，そしてメディアの在り方の問題に，わたしたち『首都圏反原発連合』も直面しています」（p. 22）と，今後の課題を見つめる。

これに関連して，「質疑応答」で，「最近，新聞を見ていると，読売新聞・産経新聞あたりがやるならまだしも，朝日新聞とかがわざわざ抗議をしていない日に取材に来て，『［官邸前抗議］激減』という記事を書いたり，毎日新聞も『参加者50分の１に』と書いたりしていました……毎週何千人が集まっているというのは，ものすごいことだと思うんです。……そういう報道をしているというのはどうなのよ，というかんじがあります。」（p. 53）という声に対して，著者は冷静的確に次のように分析している――，

やはり今年（2013年）の３月くらいに「減った減った」と報じたがる媒体が多くて，取材を受けても，とにかく「なんで減ったのか」と，意地悪なくらいにそういうふうに聞いてきます。読売新聞とかは来ませんが，官邸前には「脱原発派です」という記者の方が結構多くて，かなり顔なじみになって，ツーカーで話す記者の方たちもいます。……それが今年の２月・３月で，各社の記者の顔ぶれががらっと変わってしまいました。困ったな（ママ）……と思っていたら，案の定，とにかく「減った減った」ということを引き出そうとする記者ばかりになってしまった。……マスコミは話題として「減った」という方向にもっていきたいという意図をすごく感じました。 p. 54

こうしたエピソードは，やはり現場に立ち続けている著者だからこそのものだろうし，だからこそ，マスコミの在り方の問題を考える素材として重いものがある。

ところで，私が本書ですごいなあと唸らされたのは，「『警察』という個人の集まりに対して」という著者の考えに関わってのものである。

著者によれば，参加者のなかには「『警察嫌い』の方もいらっしゃるから」，できるだけ警察とのトラブルを起こさないようにという方針で「総勢200人近くのスタッフで」誘導をしているのだが，それに対して，「一部の参加者などから『警察と一緒になって，無意味な誘導をしている』とか『警察の犬』などと言われたり」（pp. 24～25）したという。それについて著者は，そうした批判をする人たちは「要は『反権力』『反警察』の方たちです。そういう方たちは，警察が誘導をしたり，何かを制限したりするとすぐに『弾圧だ』と言いますが，それは安直すぎます。イメージではなくて，もっとリアルな警察の事情を知ってほしいと思います。これは警察をかばっているわけでは全くありません。……現場で，警察とやりとりしているうちに理解したことです。」（p. 25）と言い，次のように具体的に展開していく――，

ひとことで「警察」と言っても，警備をしているひとたちは一人ひとり違う，自分の

考えを持っています。以前，わたしたち「首都圏反原発連合」のオリジナルTシャツをつくって，抗議の際にカンパのお礼として配布していました。その後，わたしが以前から反原発・脱原発ブースを出していた「ワン・ラブ・ジャマイカ・フェスティバル」というイベントに，「首都圏反原発連合」として参加することになり，そこでTシャツを売ることになりました。イベントは土日だったのですが，その前日の金曜日に，いつもいる警察関係のひとが，うちのスタッフのところに来て，こっそりと「ここではTシャツを買えないから，ジャマイカ・フェスに行って買う」と言ってくれたそうです（笑・拍手）。……こんなふうに，こっそりやってきて「応援してるから」と言って去っていく警察関係のひとたちもいるんです，本当に。

わたしは警視庁に行って話をするときに，はじめて会うひとにはかならず「原発のことをどう思いますか？」と訊きます。すると，多くの場合，「立場上言えないけれど，自分たちも福島に行っていますから……」という答えがかえってきます。もちろん，警察を上から下まで信頼しているわけではありませんが，一枚岩ではない。そして現場にいる一人ひとりは，みんな個人で，勤めびとであるわけです。だから接していると……「原発のことは，やっぱりいやだよね」と思いながら警備をしているひとが本当に多いので，だったら敵対するよりも協力して……と思います。　pp. 25～27

つくづく私は，この柔軟性こそが若い人たちの強さなのだろうな，と思う。そして，こうした柔軟なスタンスだからこそ，後の質疑応答で「TPPの問題などとは少し距離を置いていると話されていましたが……そこは反グローバリズムというところでは根は一緒だと思うのです。その辺のひとたちとは，関わりをもっていかないのか，そこのところをおしえて下さい。」と問われた著者は，「とにかくわたしたちはいま，『再稼働反対・原発ゼロ』というシングルイシューで官邸前抗議をすることを大事にしています。なぜかと言いますと，シングルにしてわかりやすくすることで，参加者の幅を広げるためです。」（pp. 59～60），あるいは，「それ［TPP］を混ぜてしまうと，NO NUKES MAGAZINEを読んでほしいひとたちは，TPPが原発問題にどう関係するのか，複雑な構造がわからないんですね。そういうひとたちも参加できるように，敷居を下げるという意味で，シングルイシューを打ち出して，たくさん集まってもらおうと考えています。それに，マルチイシューにしてしまうと，下がらなくていい敷居まで下がってしまうんです。」（p. 60）と答え，活動の広がりこそが目標達成のすべてである，という確かな戦略を披露できているのだろう。

そうした戦略を採る著者は，じつのところは，「モンサント社のことは，わたしは昔から，自分で植えるときは遺伝子組み換えでない原種の種を使うようにしているくらい，意識はあります」（p. 60）し，「原発の問題の根底には，これは原発だけではなくて基地の問題もありますけれど，やはり日米安全保障条約の問題があると思います。……本当は，わたしは安保条約白紙撤回という運動をやりたい。」のであり，「ただ，いまはまだ時期ではないと思います。」（pp. 60～61）という戦略家なのである。

このしたたかな著者の戦略の背後には，「とにかくわたしが思いますのは，抗議を成功

させたいということ。」という強い意思と，そして，「成功させるためには，抗議活動が『一部のひとがやっている，特別なもの』というイメージのままではいられないと思っています。だからこそ，官邸前抗議を『大衆運動』にすることを常に意識しています。参加しやすい，誰でもできる抗議。外出や会社帰りにも，ちょっと寄れる抗議。『何かの帰りに寄れる』ようにするために，夕方６時～８時という時間設定にしています。通勤鞄を持ったまま寄って，10分でもいいから一緒に声をあげて，そして帰る」（p. 44）という具体的で明確な方法論がある。

最後に，いまの私の問題意識――反グローバリズムのなかの地域経済の活性化――と重なったところを指摘しておきたい[2)]。

著者は「資本主義社会で，資本のあるものと対峙する苦悩」として，「ほとんどお金のないわたしたちがどうやって戦い，そして勝つのか。」（p. 42）と自問して，先の警察の話で出されたＴシャツに関してのお金にまつわる次のようなエピソードを披露する――，

> Ｔシャツはだいぶ前からつくろうという話にはなっていたのですが，なかなか実行できていませんでした。……ちょうどその頃，とくにお金のないメンバーが失業したところでした。わたしたちは，メンバーの誰が欠けても，組織的にも，精神的にも，活動がむずかしくなると考えていますので，そのひとを救済するために，「首都圏反原発連合」でそのひとにＴシャツづくりを依頼して，とりあえず１～２ケ月食いつないでもらおうと考えました。そのために，オリジナルＴシャツづくりを決行したのです。
>
> 　つまるところ，もっとお金があれば，と考えてしまう。　pp. 42～43

たしかに，「資本主義社会で，資本のあるものと対峙する苦悩」はどんな局面でも難問として立ちはだかる。が，それを自分たちの工夫で解決しようとすることがさらにその運動を発展させるという循環に繋がる。そして，Ｔシャツを購入することが，また資本のないわたしたちの重要な一歩でもある。原発への基本的なスタンスだけではなく，こうした具体的な手段に裏付けられているひとつの希望をも本書は私たちに提示してくれているのである。

---

2）これに関連して，水無田気流氏がマイケル・シューマン著『スモールマート革命　持続可能な地域経済活性化への挑戦』（毛受敏浩監訳　明石書店）を次のように書評している（朝日新聞2013年12月１日）――「筆者は提唱する。最も経済的貢献度の高い企業は，地域に根差した小規模ビジネスを展開する会社だ，と。この原理を『地元オーナーシップ・輸（移）入代替主義……』と呼ぶ。同業種の場合，地元企業は非地元企業に比べ，地域経済に２～４倍の収入，富，雇用を生み出すという。また，１人あたりの収入の成長率に寄与するのは小規模企業で，非地元の大企業では，むしろネガティブに作用してしまう。……高度な自立は決して孤立主義を意味しない。購買力が上昇した地域では，地元で作れない産品を積極的に輸入するため，むしろグローバル経済の価値を向上させる。」